

## サンタクロースなんているわけないじゃん…

グリーンランド国際サンタクロース協会公認サンタクロース **パラダイス山元**

高校生にもなると「サンタクロースなんているはずないじゃん」「クリスマスは本命の彼氏、彼女とデートにきまっているじゃん」なんていう風潮の日本ですが、教科書 *New Edition Surfing ENGLISH READING LESSON 7* にもありますように、サンタクロースは現実に存在します。しかもひとりではありません。世界を見渡すと100人以上もの「資格を持った」サンタクロースが活躍しているのです。

2学期が終わり、さあ、いよいよ待ちに待った夏休み！という真夏の成田空港に、季節はずれの格好で現れるおじさんがひとり。ツアー客に混じってチェックイン、出国手続き、そして飛行機に搭乗するまでずっと真っ赤な衣裳を着ているその人こそ、日本にひとりしかいないグリーンランド国際サンタクロース協会公認のサンタクロースなのです。毎年7月にデンマークの首都コペンハーゲンで行われる「世界サンタクロース会議」に出席するため、都内の自宅からデンマークの会議場まで「サンタクロースたるもの、サンタクロースの衣裳のまま集まりなさい」という決まりを守って、丸一日サンタクロース姿のまま移動するのです。「そんなんだったらサンタクロースなんだから、トナカイのそりを使えばいいじゃないの！」とこれまで何度も声をかけられました。ごもっとも。しかし、そうはいきません。サンタクロースがトナカイのそりを使えるのは一年のうち一回だけ。それはクリスマスイブの夜だけと決まっているのです。成田空港では、これから



海外に旅立つ半袖半ズボン姿の旅行客と何度も写真に収まる人気者。“Hey! Mr. Santa Claus. How are you? Why are you here now? Today is not Christmas!!” 次々と英語で質問を浴びせられるサンタクロースですが、身振り

手振りを交えながら延々と“HoHoHo～”と言いながら説明します。しばらくすると「このサンタ、日本人?」「なんだニセモノじゃん」などと言われてしまいます。サンタクロースといえば、毎年クリスマスが近づくとノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランドなどの北欧諸国から「我が国がホンモノ」と名乗り、プレゼントを抱えてタラップを降りてくる姿を日本人はニュースで何度も見ていますから、そのように刷り込まれてしまっても仕方ありません。しかし、ここに島国、日本のウィークポイントが見え隠れしていると気づく人はごく少数なのです。

そもそも、サンタクロースっていったい何者なのでしょう。ネットで調べると、トルコでキリスト教の布教をしていたセント・ニコラスさんという司祭がその起源で、その後スペイン、オランダ、ドイツ、北欧諸国を経由、現在は北極に近いグリーンランドに住んでいるということになっています。その間、それぞれの国で信仰されていた神様や、お祭りなどと合さり、その土地独特のクリスマス文化が育ちました。日本では、サンタクロースといえば、フライドチキンのお店の前に立ってるおじさんのイメージが一般的ですが、お決まりの赤い服以外にも、青い服を着ている東欧諸国のサンタクロースや、まるで登山者の格好のようなノルウェーのサンタクロースまで、見かけだけでも相当バラエティーに富んでいます。

また、日本では、特別よい子というわけでもなく、小さいころからあたりまえのようにサンタクロースからプレゼントを貰えるクリスマスですが、小枝を束ねた鞭（むち）を振り回してお仕置きをしにきたり、空っぽの袋を携えて悪い子をさらって行ってしまうというドイツのブラックサンタクロースなどという怖いサンタクロースもいるのです。

なぜ、クリスマスにサンタクロースが、子どもの欲しいプレゼントを持って来てくれるかなどと、考えたことがない人がほとんどだと思います。そしてクリスマスは、なんのための、どういう日かを知っている人が極端に少ないのが日本の特徴ともいえま

す。ハロウィンが終わったと同時に、街にはクリスマスイルミネーションが灯り、クリスマス商戦突入といった感のテレビコマーシャルばかりになります。クリスマス当日も教会のミサに行くでもなく、敬虔なクリスチャンというわけでもなく、チキンにケーキを食べ、プレゼント交換をしてクリスマスをお祝いする日本人の、外国人の目から見てなんと滑稽に映っていることか、お祭り好きな日本人のことですから、それに目くらまを立てることは同じ日本人として野暮かと思うのですが、せめて大人になるまでに「クリスマスの本当の意味」を知っておいて欲しいと思わずにいられません。

1998年に「結婚していること」「子どもがいること」「サンタクロースとしてふさわしい体型であること」という条件で、アジア初の公認サンタクロースのオーディションが行われました。これまで町のサンタクロースとしてボランティア活動に関わってきた方、お髭自慢のおじいさんなど、「我こそはサンタクロース」という方が勢揃い。ところが最終選考後、辞退者が続出。自宅からデンマークまでサンタクロースの衣裳のままで行って下さいとか、選ばれたらその後は毎年自腹で「世界サンタクロース会議」に出席して下さいと言われると、さすがに悩んでしまったのでしょうか。

直後、「やってみたら？」(テレビ局のプロデューサー)、「是非ともお願いします！」(スカンジナビア政府観光局)と、深く考える暇を与えられず担ぎ出されてしまったのがこの私でした。条件はすべて合致、体重も公認サンタクロースになるためには120kg以上が鍵と事前に聞いていたのですが、当時私は118kgの巨漢でした。

公認サンタクロースの試験というのは、デンマークへ行ってから予想以上に大変なことだということが分かりました。煙突のぼりや、クッキーの早喰いなどの体力測定にはじまり、グリーンランドをはじめ各国の長老サンタクロースとの面接、世界のサンタクロースの共通語“HoHoHo～”だけでサンタクロースの心得が書かれた宣誓文を全世界の公認サンタクロースが集まっている会場で読んだり、真夏のデンマークで孤軍奮闘しました。

そして、ついに日本人で初めて、アジア地域から最初のグリーンランド国際サンタクロース協会公認のサンタクロースが誕生しました。極東の日本から世界最年少35歳の公認サンタクロースが誕生、と現地では話題になりました。北海道札幌生まれ、物心ついたころからずっとホワイトクリスマスで、サ

ンタクロースから毎年たくさんのプレゼントを貰っていた私。小学校に入って、まわりの友だちから「サンタクロースなんかいるわけないじゃん」と吹き込まれても、「みんなの家にはもう来なくなったのね、かわいそうに…」なんて思っている子どもでした。思春期を迎え、進路のことで父親と断絶状態が続いていたときでも、クリスマスイブには枕元にちゃんとクリスマスプレゼントが置いてありました。中身は、私が志望していない大学の赤本でしたが…(笑)。

サンタクロースのことを特別に意識していたつもりはなかったのですが、今になって思えばサンタクロースの存在やクリスマスの思い出を、ずいぶん深く心に刻んでいたものだと振り返るときがあります。今年、公認サンタクロースになって13回目のクリスマスを迎えます。病院に長期入院している子どもたちや、施設でくらしていておとうさん、おかあさんといっしょにクリスマスを迎えられない子どもたちの元へ、一足先に訪れてお祝いをします。

真夏の成田空港以外でも、ひょんなところに出没したりして子どもたちを驚かせたりするサンタクロースです。先日、茨城空港が開港した初日にも、サンタクロースはプレゼントの輸送経路の確認をするため、韓国の仁川(インチョン)→茨城、そして折り返しの茨城→仁川の便に搭乗しました。あまりにも季節外れだったので、みんな目を丸くしていました。みなさんも、偶然どこかでお会いする機会があれば、是非“Hey! Mr. Santa Claus! HoHoHo～”と声をかけてみて下さいね。



デンマークで開かれる世界サンタクロース会議でのひとこま。公認サンタクロースの標準体重である120kgをオーバーした場合は、運動、ダイエットをして減量しなさいと長老サンタクロースから忠告がありました。そして関係者全員にフラフープが配られました…デンマーク、バッケン遊園地にて